

オオトキタカ（和田町）

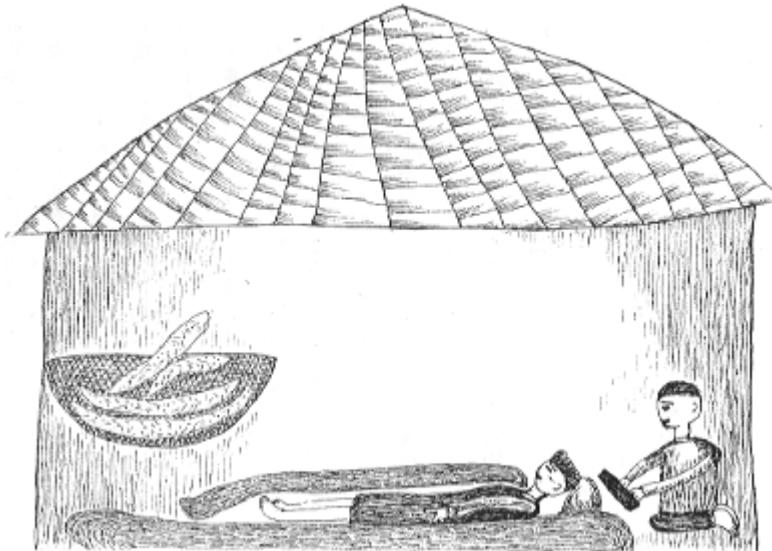
昔、山の中に、どこから来たのか、いつ頃からいるのか、誰にもわかりませんが、大変仲のよい二人の兄弟が住んでいました。

秋になると梨の実や柿の実が色づき、栗の実がはじいてこぼれ落ちました。山ぶどうも、野いちごも甘ずっぱい香りを放ち、山の中はおいしい食べ物でいっぱい。二人は楽しく暮らしていました。

やがて木の葉が散りはじめ、冬がやってきました。兄弟は力を合わせて雪がこない前に、毎日、山芋を掘って来て、冬中の食べ物としてたくわえていました。

ところが、ある日のこと、兄さんが風邪をひいて寝込むでしまいました。心配した弟は、「あんちゃん（兄さん）寝てなあかんや。うら

（僕）が山芋を掘ってくるでな。」



と山芋掘りに出かけ、兄さんにだけは毎日山芋を煮て食べさせました。

しかし、疑い深い兄さんは、

「こんなうんまい（おいしい）山芋を炊いてくれるんやが……。自分はどんなうまいもん

（おいしいもの）を食うてるんにやる。」

と思うようになり、とうとう弟を殺してしまいました。弟はかわいそうに、しょくび（山芋の先の黒くて細く固いところ）ばかり食べていたので胃袋の中は真っ黒でした。

悪いことをしたことに気づいた兄さんは、悲しみのあまり、ホトトギス（渡り鳥の一種）になって、毎年、山芋の芽の出る頃になると、

「オトトキタカ、オトトキタカ。」

と鳴き回っています。

里人たちは、この鳥をオトトキタカ（弟来たか）と呼んでいました。